

大学生における人生目標様態と学習動機づけとの関係

○王 小双 (上智大学)

廣瀬英子 (上智大学)

キーワード：大学生，人生目標，学習動機づけ

問題と目的

近年、人生目標 (Purpose) はアメリカの心理学者によって再定義され、青少年の健全な成長に肝心の要素だと主張されている (Bronk, Riches, & Mangan, 2018)。一方、学習領域における人生目標研究はまだ数が少ない。学習意欲に関する研究を見ると、特に、人生目標の「自己超越 (Beyond the self, 以下 BTS)」因子が注目され、BTS 目標を持っている学生の GPA は向上しやすく、退学も少ないことが報告され、「他人のため」など自己超越的な職業目標を持っている小中学生・高校生が、より学校の宿題や勉強を有意義だと感じていると述べている (Yeager, 2009)。人生目標は段階的な目標を管理し、方向づける特徴があり (McKnight & Kashdan, 2009)、人生全般に影響しているため、人生目標の様態が学習動機づけやその後の学習行動にも影響を与えると予想できる。特に、BTS 因子に注目し、人生目標と学習動機づけに関する研究を行う必要がある。本研究では、まず日本の大学生を対象に、人生目標様態と学習動機づけとの関係を検討することを目的とする。

方法

調査時期・対象者 2019年12月上旬—2020年1月上旬。18歳以上の日本人大学生127名。これに、2018年に行った調査 (王・廣瀬, 2019) のデータと合わせて、分析を行った。

調査内容

(1) 人生目標尺度：王・廣瀬 (2019) が作成した尺度を用いた。「探索意欲」「生きがい獲得」「努力体験」「自己超越」「生涯展望」の5因子からなる尺度。23項目、7件法。

(2) 岡田・中谷 (2006) による大学生用学習動機づけ尺度：「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の4因子からなる尺度。34項目、5件法。

結果と考察

分析1：因子構造の確認

今回と2018年に行った調査、合わせて251名分のデータを分析対象とした。探索的因子分析を行った結果、5因子構造が再現した。1項目のみ因子間で移動が見られたため、それを削除して22項目5因子の尺度とした。確認的因子分析を行ったところ、 $\chi^2=469.19$, $p < .001$, GFI=.866, AGFI=.830, RMSEA=.067, CFI=.946, TLI=.938, IFI=.947であった。

分析2：人生目標の各様態

人生目標尺度の各下位尺度得点を用いて、251

名の分析対象者に対して、クラスター分析 (Ward法) を行った。その様態スタイルを Figure 1 に示す。5つのクラスターはそれぞれ、「BTS探索者」、「幻想者」、「漂流者」、「人生目標成熟者」、「自己中心探索者」と解釈した。

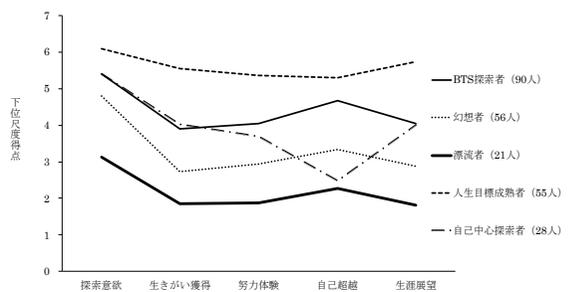


Figure 1 人生目標様態スタイル

分析3：人生目標様態スタイルと学習動機づけの関係

岡田・中谷 (2006) に従い、学習動機づけの4つの下位尺度得点を用いて、分析対象者に対してクラスター分析 (Ward法) を行った。結果として、岡田・中谷 (2006) と同じように4つのスタイルに分かれ、「高動機づけ者」、「自律者」、「取り入れ・外的動機づけ者」と「低動機づけ者」と名付けた。人生目標の各様態における、各学習動機づけスタイルの割合を Table 1 に示す。

Table 1 人生目標の各様態における学習動機づけスタイルの割合

	高動機づけ者	自律者	取り入れ・外的動機づけ者	低動機づけ者	合計
人生目標成熟者	16.4%	52.7%	9.1%	21.8%	100%
BTS探索者	23.3%	25.6%	13.3%	37.8%	100%
自己中心探索者	14.3%	17.9%	21.4%	46.4%	100%
幻想者	21.4%	12.5%	19.6%	46.4%	100%
漂流者	14.3%	4.8%	14.3%	66.7%	100%

「人生目標成熟者」の52.7%が「自律者」であるのに対して、「自己中心探索者」や「幻想者」の46.4%、「漂流者」の66.7%が「低動機づけ者」となった。そして、「BTS探索者」の48.9%が「高動機づけ者」または「自律者」となった。それに対し、自己超越得点のみ「BTS探索者」より低かった「自己中心探索者」では、「高動機づけ者」と「自律者」を合わせた割合が32.3%であり、自己超越得点のみ「自己中心探索者」より高かった「幻想者」の33.9%とほぼ同じであった。